銀杏

発行所
〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂
編集発行　瑞應寺
電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127
毎月1日発行
(振替 01330-2-31918 瑞應寺)
印刷所　東田印刷株式会社

碧巌録物語独語【二十六】

後堂　門原信典

第十九則「倶胝一指頭」寐語

⑦普天普地の猫

【評唱】円明道、寒則普天普地寒、熱則普天普地熱。

「円明道わく、寒するときは則ち普天普地寒し、熱するときは則ち普天普地熱すと」

中国の禅宗は、初祖である達磨大師から、五祖大滿弘忍禅師を経て、北宗禅と南宗禅とに分かれ、南宗禅は※中唐以後に栄えるようになります。そして南宗禅の六祖大鑑慧能禅師の下には、さらに南嶽懐譲禅師と青原行思禅師の系統に別れ、ここから五家七宗と呼ばれる分派が起きます。その中の「雲門宗」の開祖である雲門文偃禅師(八六四～九四九)は、当時の厳しい治世下にあっても弟子を薫育し、現実と佛法をしっかり見つめ、簡潔な日常語で禅の教えを示されます。『伝灯録』には法を嗣いだ弟子として六十一人もの名前が残り、後にその門派は大いに栄え「雲門宗」を形成します。『碧巌録』を初めとする禅の語録には雲門禅師の言葉が、公案（修行の題材）として多く取りあげられており、現在でも身近なところでは「日日是好日」が有名です。円明大師徳山縁密禅師も弟子の一人です。

その縁密禅師のお弟子さんが「犬にも佛性が有るか（尻尾を振ってワンワン吠える犬も佛さんですか？）」という問題に一所懸命に打ち込んでいると、なんと犬の頭が太陽の光のように大きくなって、その大きな口を開けて襲いかかってくる妄想が浮かんできました。

怖くなって、隣の僧に打ち明けると、僧は縁密禅師に伝えました。禅師は「怖れることはない、今度犬が現れて大きな口を開いてきたら、思いっきりそこに飛び込むといい」と教えました。

私が小さい頃お寺では犬を飼っていました。私が犬になついていたのか、犬が私になついていたのかわからないくらい仲良しで遊び相手でした。ところがその弟子にとって犬は吠えて飛び掛かってくるものだったのです。今はペット葬祭業もあるほどですが、犬が苦手な人にとっては、犬が佛様だなんてとても思えません。

はたしてその縁密禅師の弟子が坐禅していると、また犬が現れて大きな口を開いてきたので、禅師に云われた通り思い切ってその苦手な犬の口に飛び込もうとしたら前の壁に頭をぶつけて気が付きました。そこで悟ったのです。犬が佛様かどうかではなく、妄想に振り回されている私が今ここで坐禅している事が佛性の実践、つまり佛様そのものだったのです。縁密禅師の素晴らしいところは、「妄想を相手にするな」では無く、「妄想を妄想と気づかせる事」でした。

私達が生きている事は、様々な苦が待ち構えています。それは「生老病死」に代表される「四苦」と云う生命の根源的な苦しみと、人間として生きていく上で自分が一番大切という自我から生まれる苦しみがあります。「愛別離苦」大切で大好きな人や物であっても、いつかは失い離れなければならない苦しみ。「怨憎会苦」逆に大嫌いで見たくもない人や物でも、出会い頂かなければいけない苦しみ。「求不得苦」安楽や幸福、理想等求めるモノゴトが手に入らない苦しみ。「五蘊盛苦」自分の心や、自分の身体すら思い通りにならない苦しみ。これを合わせて「八苦」と云います。

つまり地球上に今の人間が誕生して何万年経過していても「四苦八苦」は逃げる事の出来ない永遠普遍の苦しみなのです。そこに橋本老師の「にごり江に根を培いて咲きいずる蓮の花をみ心にして」のお示しが有り難く、深く心に沁みます。

今から十一年前自坊の護持会の副会長さんが還暦を迎えて逝去されました。葬儀が終わってから喪主である息子さんと話をしている中で「父が亡くなっていろんな事がわかりました。本当に立派な父親でした」と感謝の言葉を言われました。私は「お父さんがある日『息子が親父を超えて見せる』と云ってくれたと嬉しそうに言ってたよ。お父さんが亡くなられたお陰で分かったことではあるけれど、お陰では無く良い言葉が見つからないかなあ」と云ったら、その息子さんはしばらく間を置いて「父の死をきっかけにわかったことですね」と云ってくれました。その「きっかけ」という言葉こそ佛縁という事でした。

自分にとっての「苦」も私を生かして下さっている佛縁、み佛様の恵みでした。温暖化とはいえ大寒に入り厳しい寒さに向かおうとしています。しかし「梅は寒苦を経て清香を放つ」のです。反対に夏は近年想像を超える猛暑。私達はこの熱苦さえも恵みと受け取る事が出来るでしょうか。私達にとってちょうど良い時期はアッという間に過ぎて行きます。

「円明大師徳山縁密禅師が言われました。寒するときは則ち普天普地寒し、熱するときは則ち普天普地熱す」寒も熱も「普天普地」つまり「天地いっぱい」という事です。「天地いっぱい」からは逃げられないのです。「普天普地の私」ならば「普天普地の四苦八苦」そこから逃げずに、犬の大きな口に飛び込むように全てを頂いてこそ、私の執着に気付き、思いもしなかった佛様の道も見えてきます。

私は犬派だったのですが、今は猫を飼っています。猫こそ忖度無し、真実と同じで容赦ありません。天使にも悪魔にも、否佛様にも鬼にも成ります。マァそれも私の都合ですが。

（続く）

※唐代を初・盛・中・晩の四期に区分したその第三期。代宗の大暦元年（七六六）～敬宗の宝暦二年（八二六）

道元禅師の「一残水」は千億人が分かち合えるか？

高岩寺　来馬明規
東京巣鴨とげぬき地蔵尊高岩寺住職・医師・医学博士
東北福祉大学客員教授　日本禁煙学会役員

【はじめに】

今月は有名な「杓底の一残水」についてお話させてください。

大本山永平寺を訪れると、最初に高さ４メートルほどの石柱一対が眼に入ります。それぞれに漢詩の一部（偈）が五文字彫られており、

右　杓底一残水
左　汲流千億人

とあります。この偈の背景となる、道元禅師に関する説話を、永平寺編集の法話集より長文引用します。(1)

大本山永平寺正門（東川寺撮影・提供）(2)

【わずかな水を川に戻す】

「杓底一残水、汲流千億人」は、高祖（道元禅師）の在世時に由来する伝統のお話であります。あまりにも日常的な場面のためでしょうか、文字になっているものは、この本山入り口の石柱以外には見ることがないようです。

ある朝のことでした。（道元禅師は）いつものように、谷川の引き水を柄杓で桶に汲まれて洗面なされようとしておられました。必要なだけお汲みになられた高祖の手にある柄杓には、半杓ほどの水が残っていました。その残り水を高祖は谷川へ戻されたのです。いつものように高祖の身の回りのお世話の係の修行僧の一人が側におられたのですが、この時はじめて残り水を谷川へ戻されたという高祖の作法に気がついたのでした。

朝の行持が終わったときに、この修行僧がその残り水の処し方をたずねたのでした。この永平寺は山の中でもあり、水源に近いこともあり、水量が豊かなので柄杓に少量の水などは谷川へ戻されなくても、影響はないのではないかという心境を高祖に述べたのでした。それに対して高祖は、

「なるほど、この永平寺は山の中でもあり、今は水量も豊かに思えるだろう。がしかし、天候次第では水の量は変わるだろう。しかも、この谷川の川下には多勢の人々が生活しており、その生活用水としても使っているのだよ。世の中の多くの人々によってこの永平寺での修行生活も支えられていることを思うとき、他の人々への連帯としての思いが、この少量の水であっても、戻さずにはおられないのだよ。この永平寺がいつまでも修行の道場として多くの修行者を育てていくためにも、多くの世の中の人々から支えられるように心遣いをしなければならないのではないか。それがあの柄杓の水を少量であっても谷川へ戻すという行為になるのだよ。」

と語られたのでした。〝いのちの水〟ともいわれ、この修行僧から伝え聞かされた他の修行僧も、これから以後、こうした高祖の細やかなまでの修行のあり方にしたがって、一層精進したのでした。その伝統が連綿として平成の時代の（引用稿執筆当時）今日まで伝わっているわけです。

永平寺の第一歩を迎える石柱が、永平寺の家風（修行の方針）を物語っているのです。」

（正野光周師　平成11年　引用終）

【偈は熊澤禅師の漢詩に由来】

この「説話」は曹洞宗門でくり返し紹介されていますが、上述のように永きにわたり口伝で伝えられ、出典ははっきりしていません。一方この「偈」は、道元禅師の作ではなく、永平寺七十三世熊澤泰禅禅師が詠まれた漢詩の第三、四句であることが知られています。熊澤禅師ご自身が次のように解説されています。(3)

「今回、（略）久しく無字のまま総門左右に立っていた石の門柱に「杓底一残水」「汲流千億人」と老衲が書いて刻み込んでもらったのも（略）、祖山安居（永平寺で雲水修行）の眼目であり、永平寺参拝の根本義であることを、年年上山の兄弟、日々参拝の人々に知ってもらいたいからに他ならない。（略）この大門は、永平寺に入る総門であると同時に、宇宙法界に向かって開かれている正門である。この大門は、一個半個の真実求道者が来たって古道、すなわち永遠絶対の道を究めるところである。杓底の残水淙淙と流れるところ、千万億の人来たって、斉しく高祖大師の恩徳を掬するところである。といった意味で、特に「正門」と呼ぶことにしたのである。」(4)(5)

この漢詩を凡夫の私が冷や汗もので現代語に訳しますと、

題正門

永平寺正門のありようを示そう

起句　正門当宇宙

永平寺の正門はすべての方向と時間に向かって開かれており

承句　古道絶紅塵

俗世間の煩悩から隔絶された只管打坐の修行道場であるが

転句　杓底一残水

生活のすべてが仏道修行である例えば柄杓に残ったわずかな水も大切に川の流れに戻し大自然と人々に報恩と感謝を捧げるのだ正門はそのような高祖の教えが脈々と流れ伝わるところである

結句　汲流千億人

千億人を潤す杓底の残水は高祖の教えそのものである千億の人々よまさに今来たってここに集まり高祖の恩徳を学び取るがよい

【水と千億人にふたつの意味】

第一、二句で修行道場として両立すべき「寛容と厳格」が表現され、永平寺のさらに奥にある山門に掲げられる聯の冒頭の句「鎖鑰放閑」「家庭厳峻」に対応しているように見えます。

そして第三、四句は「水は貴重な共有財産」という仏教道徳だけではありません。「一残水」は「道元禅師のみ教え」の意味もあり、水が流れ、汲まれるように、み教えが多くの人々に広く伝わってほしい、という

熊澤禅師の誓願が込められていることが読み取れます。「千億人」は具体的な数字ではありませんが、これも「水を受けとる人」と、「道元禅師の教えを学び伝えていく人」が多くあれ、永くあれ、という願いのふたつの意味があるようです。

【一残水は千億人が分かち合える】

さて、禅仏教の文字表現には一般常識では荒唐無稽にも見えるような表現が少なくありません。一体全体「たった半杓の水を千億人が分かち合う」ことが可能なのでしょうか？

身勝手な理屈ですが、私はできると思うのです。高校の物理化学の知識で「水1グラムの中にある水の分子の個数」は簡単に計算できます。

原子	原子量	個数
水素(H)	1	2
酸素(O)	16	1

水(H_2O)の分子量は
1+1+16=18

まず、水はH_2O（水素2個と酸素1個）で示されます。その「分子量」は18です。分子量の数にグラムをつけた「18グラムの重さの水」にはかならず「約6×10の23乗」個の分子が入っています。

アメデオ・アヴォガドロ
(1776-1856)

アボガドロ定数は
$6.02214076 \times 10^{23}$

この「約6×10の23乗」という数は「アボガドロ定数」と呼ばれます。

「同じ気圧・体積・温度に保たれた気体は、大小どんな分子であってもその数は同じ」という「アボガドロの法則」を証明したイタリア人学者アメデオ・アヴォガドロ先生にちなんでいます。

（私が米国勤務中の上司医学部教授の定番オヤジギャグが「お前はアボカドを「アボガドロ定数」個も食べたのか？」でした。）

杓底の一残水が仮に水18グラム（18cc）とすれば、そこには約600,000,000,000,000,000,000,000,000個の水分子が入っています。ですから一残水は千億人（10の11乗）もの人々（衆生）が、一人あたり6×10の12乗個もの水分子をいただける、というわけです。

【水は地・空・海を循環する】

さらに言えば、水は環境中を循環しています。水は海や大地から蒸発し、雲となり、雨雪となり、川となってふたたび海に注ぎます。道元禅師が毎日のように戻された水の分子の数は、右の数字に1年365日と道元禅師が永平寺に在山された10年弱がかかり、それらが数ヶ月～数年周期で地・空・海をぐるぐる回ります。皆さんの体の中を通り過ぎていった水の中には、道元禅師が戻された一残水の1分子があったかもしれないのです。

【引用・註】

(1) 正野光周（山形県 長應寺東堂）「永平杓底の水 - 水はいのちの源」『慕古の心』P380-385大本山永平寺高祖道元禅師750回大遠忌事務局編 平成11年。正野師は、これは当時石柱に添えられた立札の転載とされました（私信）。丁寧でわかりやすく、本山に直接由来していることから引用しました。

(2) 北海道東川寺 ホームページ『大本山永平寺諸禅師略伝』より転載許可をいただいた写真です。

(3) 熊澤泰禅 「門に入る魚は竜と成る」熊澤泰禅禅師全集『雪庵廣録』第三 P319-323天藤全孝編 昭和五十六年。前掲(2)のホームページに全文掲載。（QR参照）

(4) 熊澤禅師が「正門」と呼ぶように意図されたのは、道元禅師がよく示される「正伝の仏法」「仏祖正伝の坐禅」を意識されたのでは、と推察いたします。しかし、最近の永平寺修行経験者から聴取しますと、「正門」は慣用的に「竜門」と呼ばれています。しかも多くの若手宗侶が、「一残水の偈」は道元禅師が詠まれたと誤解していることも、本稿を執筆したきっかけです。

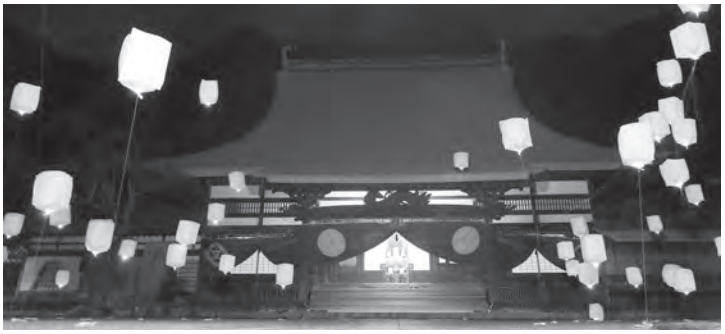
(5) 菅原研州 平成三十一年度 宗務庁布教師養成所『講義録』「『学道用心集』で説かれた教えについて」P180-212。菅原師（愛知学院大准教授）は大本山總持寺独住第四世石川素堂禅師（1842～1920 現愛知県名古屋市ご出身）が、一残水の説話を熊澤禅師（1873～1968 現愛知県一宮市ご出身）に伝えたと指摘しています。

(6) 當山二十九世楢崎一光老師は、開浴（入浴）の際、手桶の湯を全部洗面器に移さずに、少し残して湯船に戻されたそうです。お湯に対する感謝と報恩の想いが伝わります。

新春書初め

■三朝大般若祈祷

正月一日より三日間、朝課時法堂にて大般若転読祈祷を厳修。檀信徒の皆様の繁栄と諸縁吉祥を祈願いたしました。


大晦日　スカイランタン境内を彩る

■寒修行托鉢

恒例の寒修行托鉢が一月十九日（日）より三十日（木）まで修行され、山内大衆、役寮諸師共に、上部地区を中心に浄行乞食。浄財施者十方檀那に深謝。

寒修行托鉢

一月の日鑑

一日	大般若祝祷諷経 歳朝人事・年賀ノ拝
二日	角野消防団初祈祷
三日	寿餅ノ拝
五日	年頭総代会 日曜参禅会
七日	おねはん受付開始 参玄会（九日迄）
十五日	祝祷・略布薩
十八日	観音講・勉強会
十九日	寒行托鉢（廿日迄）
廿一日	略布薩

二月の予定

一日	祝祷 涅槃摂心（四日迄）
二日	日曜参禅会
七日	金毘羅初大祭
九日	日曜参禅会
十四日	土地堂念誦
十五日	祝祷・小参・人事行礼 涅槃会・略布薩
十六日	日曜参禅会
十八日	観音講（仏教勉強会）
廿三日	日曜参禅会
廿六日	法戦式
廿八日	略布薩

銀杏感謝録

東京都	長光寺　殿
岩手県	長福寺　殿
北海道	瑞英寺　殿
東京都	竹内崇司　殿
愛媛県	近藤正經　殿
東京都	五十嵐丈夫　殿
オーストラリア	是松慧海　殿
広島県	慶壽院　殿
福島県	円通寺　殿
茨城県	常光院水戸精舎　殿
愛媛県	野間寺　殿
長崎県	宝泉寺　殿
兵庫県	深谷寺　殿
京都府	鳥越万寿子　殿
広島県	西林寺　殿
愛媛県	玉泉寺　殿
愛媛県	梶原恵都子　殿
北海道	大貫寺　殿
宮城県	戸田恭子　殿
愛媛県	宮崎芳久　殿
兵庫県	村田浩一郎　殿
愛媛県	福田小百合　殿
愛媛県	高昌寺　殿
愛媛県	明光寺　殿
大分県	長松寺　殿
鳥取県	入江順子　殿
愛媛県	大通寺　殿
岐阜県	大幢寺　殿
岡山県	名越礼祥　殿
島根県	浄心寺　殿
東京都	片上学　殿
岡山県	東林寺　殿
静岡県	洞慶院　殿
大阪府	松田志保子　殿
東京都	志々目雅明　殿
愛媛県	無量寺　殿
愛媛県	大雄寺　殿
愛媛県	善光寺　殿
愛媛県	西願寺　殿

（令和六年十月八日受付迄）

鐘声

『光陰虚しく度ること莫れ』

私は雲水として修行する中でこれまで意識しなかったことを感じるようになりました。

「季節」。木々が徐々に紅葉していく姿を見る事ができます。さらに服装も作務衣、着物に限られるため気温の変化が顕著に感じられます。

「音」。修行する中で多くの鳴らしものがあることを知りました。初めは、今鳴っているものは何なのか全く分かりませんでしたが、何の為に鳴らしているのかを知っていくにつれて音の意味や違いを感じられるようになりました。

修行以前の生活では多くの事に気をとられ感じなかった小さな変化、意識していなかった身体の感覚に気付き、とても新鮮で充実した経験をさせて頂いています。

自分がこれまで意識していなかったことや感覚を大切に、一日一日を丁寧に生きていく所存です。

首座　泰晴